

重点取組分野	令和 4 年度		総括
	具体的取組	自己評価結果	
個に応じた指導	①特別支援教室を個の習熟度に合わせた学習支援だけでなく、ソーシャルスキルトレーニング、児童理解と児童支援、通級教室や特総センターなど、他機関との連携するためのスタートの場としての考えは特別支援教育の分野であった。②ICT機器を活用し学習の見える化を図る。③家庭学習(自主学習)を個で決定し主体的に取り組む。	①個の習熟度に合わせた学習支援を特別支援教室として行ってきた。全職員で運営して良かった。ソーシャルスキルトレーニングを行うまでには至らなかった。通級教室や特総センターなど、他機関との連携するためのスタートの場としての考えは特別支援教育の分野であった。②ICT機器を活用し学習の見える化を図った。タブレット使用時の約束を改めて考える機会があった。③主体的に家庭学習(自主学習)に取り組む児童は一部に留まった。より積極的な例示や指導が必要と考える。	B
人権教育	①「あおぞら活動」(たてわり活動)等異学年交流を通して、児童が互いの個性を認め、思いやる心や自他との関わり方について学ぶ。②リーダー・イン・ミーや道德の授業、人権週間の取組等を通して、児童の人権意識を高める。また、人権教育授業参観などを利用して保護者との連携を図る。	①「あおぞら活動」を通して、異学年の児童同士の交流が深まり、互いのことを考える態度が養われた。特に上級生が下級生のことを考えた発言や行動が見られた。②相手のことを考えた発言も見られる一方、相手を傷つける発言や行動もまだ見られる。保護者とも連携を図りながら、児童の人権意識の向上に努めていきたい。	B
健康教育	①健康会議や保健委員会の活動を通して、正しい手洗い、うがいの周知と実践の習慣化を目指す。②縄跳び週間や長縄集会などを通して、身体を動かすことの習慣化を図る。	①健康会議や保健委員会などで、正しい手洗い・ハンカチの常時携帯を中心に自主的に衛生活動に取り組めるように取り組んできた。学級ごとに決めてきた。自分自身の行動を振り返ることで、自主的に取り組む児童は増えたと感じる。習慣化するまでには、至っていないので、次年度以降も意識付けしていくことが望ましい。②長縄集会をはじめ、児童会授業の異学年交流も再開したので、比較的運動を楽しむ児童は増えたと感じる。次年度には、運動を楽しむ児童を増やすために計画的に取り組む必要がある。	B
自分づくり教育 (キャリア教育)	①リーダー・イン・ミーの考え方を生かして、自分の行動を自分で決め、責任を果たしていく中で、めあてや目的に沿ってふりかえりをする機会を確保し、自分の成長を見つめられるようにする。②自分ができていることを探し、周りの人と協力して問題解決する豊かな体験活動を地域や社会との関わりを大切にしながら行う。	①キャリアパスポートにリーダー・イン・ミーの考え方をリンクさせ、自分の行動を自分で決め、責任を果たしていく中で、めあてや目的に沿ってふりかえりをする機会を確保し実施してきた。他と比べるのではなく、自分なりの成長を感じることができているように思う。②自分ができていることを探し、周りの人と協力して問題解決する姿は多く見られたが、コロナの影響もあり、地域人材を生かした体験的な活動は十分にできてはいない。	A
いじめへの対応	①児童アンケートを毎月実施し、いじめの早期発見、早期対応等を心がけ、いじめ防止に努める。②「学校いじめ防止対策委員会」を毎月開催し、情報共有し、支援のスキルを高める。また、いじめの疑いがある段階で、直ちに「学校いじめ防止対策委員会」を開催し、情報収集と指導を行う。	①児童アンケートを毎月実施し、生活アンケート実施後の6月、9月、2月には全児童と担任及びその他の教職員が面談を行い、いじめの未然防止や早期対応につなげられるようにした。②「学校いじめ防止対策委員会」を毎月開催し、児童支援専任が中心となり複数の教職員で情報共有及びいじめに対応するための支援スキルアップ研修を行った。緊急の場合には定例会を待たずに対応した。	A
人材育成・組織運営(働き方)	①主幹教諭を中心に経験のある教員の指導・助言のもと、実技研修・授業検討等実践的なメンター研修を進め、経験の浅い教職員の資質向上に努める。②教員の授業力向上を目指す。キャリアアップに応じた研修会・研究会への積極的参加をすすめる。③会議・行事の見直しをすすめ、週1日の定時退勤日を確立する。	①OJTメンターチームを中心に、授業検討や実技研修など、実践的な活動を主体的に取り組めた。②それぞれの教職員が、各自のキャリアステージに合わせた研修や研究会に積極的に参加し、キャリアアップに努めた。③週1回の定時退勤日は設けているが、時間内に帰宅できる職員は少なかった。	B
特別支援教育	①TTや取り出しで児童の指導をする中で、児童理解を深め、全職員で共有し指導にあたる。②特別支援教室を設置し、安心して過ごせる場所として子どもの悩みや願いを児童支援専任を中心に聞くようにする。	①TTや取り出しの授業を積極的に行ってきた。教職員全体で関わることで、児童理解につながり多方面で支援の必要な児童を支えることができたと感じる。②特別支援教室では、支援の必要な児童のために環境を整え、安心して過ごせる場を目指して取り組んでいる。習慣的に支援室を活用することで安心感も生まれ、児童支援専任と心を通わす場面も増えたので、心のよりどころとなったと感じる。	B
地域学校協働活動	①教育ボランティアの協力を得ながら、朝読書、読み聞かせ、お話会や学級文庫の宅配などを通して、読書活動を一層推進し、児童の豊かな感性を育む。②地域コーディネーターを中心として学習支援の場を設定したり、校内の環境整備を行ったりして、地域とともに子どもたちの育成を図っていく。	①教育ボランティアの協力を得ながら、読書環境の充実を図ることができた。②地域コーディネーターを中心に、校内の環境が整った。	A
a24			
a14			
a25			
a15			
ブロック内評価後の 気付き	①共通に取り組んでいる「あいさつ運動」は、児童間や教師への挨拶ができるようになってきているが、学校への訪問者や学校外についてはまだ指導が必要である。②児童生徒交流はお互いに目的意識をもって進めることができおり、中学生の部活や学習の姿などを数年後の自分の姿とらえて目標とする児童もみられる。		
学校関係者 評価	授業を参観してどの学年も子どもたちが自分で考えて動けると感じた。自分の感じたことを言葉で表すことができるようになってきたのではないかと、学校は先生と子どもが一緒に楽しくまわっている。リーダー・イン・ミーはこの3年間だけでなく、この先にも成果が出てくると思う。地域では子どもたちが元気に遊んでいる。公園では年上の子が小さい子に対して場所を譲るなど配慮する姿を見かけた。保護者の子に2代目3代目の人がいて地域に根ざしている所がよい。幼稚園が隣地にあることを一層活かしたい。家庭では家庭の中で教えるべきことがある必要性を感じた。また子どもに対するときは笑顔で接し、その自尊心育成につなげたい。		
中期取組 目標 振り返り	学校運営のベースにリーダー・イン・ミーを置き、3年目になった。各教育課題への取組でもリーダー・イン・ミーの考え方や取組を生かしている。子どもや職員の間で考え方が浸透してきている。学校の活動の中での主体的に物事を取り組むことや協力して取り組むことなど成果は見られる。一方、まだまだ主体的に取り組めない姿が見られたり、日常生活で生かせるようになっていない場面があるので、次年度以降も継続的に指導が必要である。教師の人権尊重の意識は高まっているので、日々の子どもの人権意識の向上につなげていきたい。		

重点取組分野	令和 5 年度		総括
	具体的取組	自己評価結果	
個に応じた指導	①個の習熟度に合わせた学習支援を特別支援教室として全職員で引き続き運営していく。②個の習熟度に合わせ、タブレットを活用する。板書の撮影や文章の入力等を有効に使用し学びの支援とする。③家庭学習(自主学習)を推奨し、成果物の例示を中心に指導する。	①特別支援教室を設定し、個に合わせた学習支援を実践できた。また、T2や取り出し等、学習スタイルも一人ひとりのニーズに合わせて取り組めた。②タブレットによる学習は、それなりの効果をもたらしたが、ルールが徹底されない場面も見られ、今後の活用方法の見直しが必要である。③自主学習の定着率が高まった。	B
人権教育	①「あおぞら活動」での異学年交流を通して、幅広い年齢層の人と関わることで、相手意識をもって会話したり、どんな態度で接すればよいかなどを考えたりすることができるようにする。②リーダー・イン・ミーを取り入れた学習計画や行事計画を行う。③人権週間を設定し、児童、保護者、教職員が一緒に人権について考えるようにする。	①年間「あおぞら活動」を定期的に行うことで、異学年の児童同士の交流が深まり、相手を意識して行動する姿がたくさん見られた。②③学習活動の中で、相手のことを考えて発言したり行動したりする機会を設けたことで、児童の意識も高まってきた。しかし、相手を傷つける発言や行動もまだ見られるため、人権週間や道德の時間を通して、より児童の人権意識の向上に努めていきたい。	B
健康教育	①健康会議や保健委員会以外に、運動委員会とも連携し、安全衛生という考えで、活動の幅を広げ自習的に取り組める子の育成を図っていく。②年間を通し、運動を楽しむ児童を育むために計画的に取り組む必要がある。様々な運動を取り入れ、遊びを通して多様な動きを経験し、すすんで運動する児童の育成を目指す。	①保健委員会の活動で、ストレッチと早寝早起きの推奨を行った。また、運動委員会では、長縄集会を通して体力アップに取り組んだ。②今年度はストレッチと長縄集会での取り組みが主になった。集会では各クラスの目標に向けて、休み時間等自主的に外に出て練習する姿が見られた。	B
自分づくり教育 (キャリア教育)	①キャリアパスポートにリーダー・イン・ミーの考え方をリンクさせ、自分の行動を自分で決め、責任を果たしていく中で、めあてや目的に沿ってふりかえりをする機会を引き続き確保し、実施する。②自分ができていることを探し、周りの人と協力して問題解決する豊かな体験活動を地域や社会との関わりを大切にしながら行う。地域人材との関わりがもてるように活動計画を立て実施する。	①キャリアパスポートにリーダー・イン・ミーの考え方をリンクさせ、自分の行動を自分で決め、責任を果たしていく中で、めあてや目的に沿ってふりかえりをする機会を引き続き確保し、実施できた。②自分ができていることを探し、周りの人と協力して問題解決する豊かな体験活動を地域や社会との関わりを大切にしながら行っていた。地域人材との関わりがもてるように活動計画を立て実施できた学年が多かった。	A
いじめへの対応	①児童アンケートを毎月実施し、いじめの早期発見、早期対応等を心がけ、いじめ防止に努める。②「学校いじめ防止対策委員会」を毎月開催し、情報共有を行うとともに支援スキルアップ研修を行った。緊急の場合には定例会を待たずに対応した。	①②③毎月、様々なアンケートを実施し、丁寧に聞き取りを行った結果、いじめの早期発見につながった。また、いじめ防止対策委員会を通して、気になる子の共通理解をする意識が高まった。	B
人材育成・組織運営(働き方)	①主幹教諭を中心に、OJTメンターチームメンバーの指導・助言を行いながら、実践的な研修を計画的に行っていく。②定時退勤日を設定し、みんなが勤務時間内に退勤できるよう、仕事の分担を行っていく。	①主幹教諭を中心に、OJTメンターチームメンバーの指導・助言を行いながら、実践的な研修を計画的に行うことができた。②定時退勤日の設定を定期的に行うことがむずかしかった。勤務時間内に退勤できるよう、引き続き仕事の効率化・分担を行っていく。	B
特別支援教育	①TTや取り出しで児童の指導をする中で、児童理解を深め、全職員で共有し指導にあたる。②児童が安心して過ごせる場所として特別支援教室や保健室を活用していた。特別支援教室では、学習支援の他に児童の悩みや願いを児童支援専任を中心に各職員が聞き、困り感に寄り添って対応できるようにする。③YPAアセスメントの実施と活用をより一層推進する。	①TTや取り出しで児童の指導をする中で、児童理解を深め、全職員で共有し指導にあたる。②児童が安心して過ごせる場所として特別支援教室や保健室を活用していた。特別支援教室では、学習支援の他に児童の悩みや願いを児童支援専任を中心に各職員が聞き、困り感に寄り添って対応できるようにした。③YPAアセスメントの実施と活用を研修を通して推進させることができたと感じる。	B
地域学校協働活動	①教育ボランティアの協力を得ながら、朝読書、読み聞かせ、お話会や学級文庫の宅配などを通して、読書活動を一層推進し、児童の豊かな感性を育む。また、放課後学びの場の充実を図り、基礎学力の定着を図る。②地域コーディネーターを中心に、校内環境の維持に努める。	①教育ボランティアの協力を得ながら、朝読書、読み聞かせ、お話会や学級文庫の宅配などを通して、読書活動を推進することができた。児童の豊かな感性を育む一助となった。放課後学びの場では児童の参加人数が増え、学習習慣や基礎学力の定着を図ることができた。②地域コーディネーターを中心に、花壇や掲示物など校内環境の維持・美化を行うことができた。	A
b9			
a14			
b10			
a15			
ブロック内評価後の 気付き	①自発性を育てることに限らずには、児童生徒の自主性は一部に限られてしまっており促しが必要である。②相手の意見を受けとめ、自分の意見を後から伝えることができるようになることで、対話がうまく話し合いができるようになった姿がみられた。		
学校関係者 評価	小中9年間を見通した長いスパンでの特別支援教育が必要である。いじめの問題・不登校児童の問題は、引き続き真摯に取り組んでいかなければならない。不登校児童の保護者が孤立しがちなので、交流の場があるとよい。今後も教育の現場で大事にすべきことを話題に取り上げ確認していきたい。コロナ5類移行を経て、地域の行事が増えていることから、地域の方々と交流を一層大切にしていきたい。思考力や読解力を伸ばす読書習慣、挨拶をきちんとすることなどについても家庭教育と連携しながら継続して取り組んでいけるとよい。		
中期取組 目標 振り返り	タブレットを用いたICTの効果的活用を重点的に進めていくことで、授業において児童の思考・判断の流れをよみとることを意識してきた。ICT活用によって児童の抵抗感や苦手意識を軽減していることや、つまずきが現状していることに繋がっているように感じた。今後、教師がシンキングツールの活用方法への理解を深め、効果的に授業展開していけるようにスキルを向上させていきたい。、		

重点取組分野	令和 6 年度		総括
	具体的取組	自己評価結果	
個に応じた指導	①「あさチャレンジ」や「スペシャル算数」等、個の習熟度に合わせた学習支援を引き続き運営していく。②重点研究【情報・ICT】と関連させ、個の習熟度に合わせたタブレットの活用を推進する。板書の撮影や文章の入力等を有効に使用し学びの支援とする。③家庭学習(自主学習)を推奨し、成果物の例示やコメントによる励ましを行うことで意欲を喚起する。	①個の実態に合わせた学習支援を行うことができた。②個の習熟度に合わせ、タブレットを活用した学習展開の工夫を行えた。③家庭学習は、個によって差が生じてしまった。児童一人ひとりの実態に合わせた自主学習のアドバイスの難しさがあった。	B
人権教育	①「あおぞら活動」での異学年交流を通して、様々な人に関わることで、相手意識をもって会話したり、自らの言動について考えたりできるようにする。②リーダー・イン・ミー【七つの習慣】を継続的・計画的に取り入れた学習を実施する。道德教育を関連させ全学級で公開授業を行う。③人権週間を設定し、児童、保護者、教職員が一緒に人権について考える機会をもつ。	①年間「あおぞら活動」での異学年交流を通して、様々な人に関わることで、相手意識をもって会話したり、自らの言動について考えたりできるようにする。②リーダー・イン・ミー【七つの習慣】を継続的・計画的に取り入れた学習を実施する。道德教育を関連させ全学級で公開授業を行う。③人権週間を設定し、児童、保護者、教職員が一緒に人権について考える機会をもつ。	B
健康教育	①健康会議や保健委員会、運動委員会が連携し、安全衛生という考えで、活動の幅を広げ自主的に取り組める子の育成を図る。②年間を通し、運動を楽しむ児童を育むために計画的に取り組む。様々な運動を取り入れ、遊びを通して多様な動きを経験し、すすんで運動する児童の育成を目指す。③朝食の喫食率や給食の残食量の軽減に向け、基本的な食事習慣の定着化を図る。	①保健委員会の児童朝会や健康会議での取り組みを校内にも浸透させ、活動につなげることができた。②運動委員会の取り組みとして、体力向上に向け短縄とベースランニングを行い、運動にすすんで取り組む機会を設けることができた。また、長縄集会を実施し、学校全体としても運動に親しみ機会を設けることができた。③食育の一環として、給食週間に合わせて学校給食の成り立ちを振り返り、給食に対する感謝の気持ちが高まるように給食調理員さんたちへ手紙を書く活動に取り組んだ。	B
自分づくり教育 (キャリア教育)	①キャリアパスポートにリーダー・イン・ミーの考え方をリンクさせ、自分の行動を自分で決め、責任を果たしていく中で、めあてや目的に沿ってふりかえりをする機会を引き続き確保し、実施する。②自分ができていることを探し、周りの人と協力して問題解決する豊かな体験活動を地域や社会との関わりを大切にしながら行う。地域人材との関わりがもてるように活動計画を立て実施する。「未来カンパニープロジェクト」を活用し、生活科や総合活動の推進を図る。	①キャリアパスポートにリーダー・イン・ミーの考え方をリンクさせ、自分の行動を自分で決め、責任を果たしていく中で、めあてや目的に沿ってふりかえりをする機会を引き続き確保し、実施できた。②自分ができていることを探し、周りの人と協力して問題解決する豊かな体験活動を地域や社会との関わりを大切にしながら行っていた。地域人材との関わりがもてるように活動計画を立て実施する。「未来カンパニープロジェクト」を活用し、生活科や総合活動の推進を図る。	A
いじめへの対応	①児童アンケートを継続的に実施し、いじめの早期発見、早期対応等を心がけ、いじめ防止に努める。②「学校いじめ防止対策委員会」を毎月開催した上で、全教職員で情報共有を行う。いじめの疑いがある段階で「学校いじめ防止対策委員会」を臨時に開催し、情報収集と指導、対応にあたる。③積極的いじめ認知に努め、複数の教職員で児童を見守り対応する体制を整え支援スキルを高める。	①アンケートを通して、児童一人ひとりの様子をしっかりと見取りいじめの早期発見に努めることができた。②いじめ防止対策委員会は、常に全教職員で行い、いじめの実態や状況の共有を確実に図り、対応の共通理解を行えた。③児童の気持ちを第一に考え、積極的いじめ認知に努めた。	A
人材育成・組織運営(働き方)	①主幹教諭を中心に、OJTメンターチームメンバーの指導・助言を行いながら、実践的な研修を積極的に行っていく。②定時退勤日を設定し、勤務時間内に退勤できるよう努める。役割り分担を明確化・細分化させ一層局集中を避ける。③作業や会議等のICT化を促進し、短時間に少ない労力で行う。	①主幹教諭を中心に、OJTメンターチームメンバーの指導・助言を行いながら、実践的な研修を積極的に行っている。②定時退勤日を設定し、勤務時間内に退勤できるよう努める。役割り分担を明確化・細分化させ一層局集中を避ける。③作業や会議等のICT化を促進し、短時間に少ない労力で行う。	A
特別支援教育	①TTや取り出しで児童の指導をする中で、児童理解を深め、全職員で共有し指導にあたる。②児童が安心して過ごせる場所として特別支援教室や保健室を活用する。③YPの教職員研修を通して、教職員のYPの理解を深めることはできたが、実践に結びつかない教職員もいた。	①年度当初は児童の実態に応じて、取り出しによる支援を行っていたが、校内体制の変化により年度途中から一部の支援が行えなくなった。②児童が安心して過ごせる場所として、特別支援教室の運営を年間を通して行えた。③YPの教職員研修を通して、教職員のYPの理解を深めることはできたが、実践に結びつかない教職員もいた。	B
地域学校協働活動	①教育ボランティアの協力を得ながら、朝読書、読み聞かせ、お話会や学級文庫の宅配などを通して、読書活動を一層推進し、児童の豊かな感性を育む。また、放課後学びの場の充実を図り、基礎学力の定着を図る。②地域コーディネーターを中心に、「創立50周年」における校内環境の維持や整備に努める。③「創立50周年実行委員会」を発足し毎月の検討会を行う。(12月に記念式典実施)	①50周年を迎えるにあたり、通常以上にボランティアの協力や連携を図ることで、あさよみ、総合的な学習の時間が充実し児童の主体的や完成を育むことができた。②③地域CO・花と緑のボランティアの方を中心に花壇の整備や校庭の整備をすることができた。	B
a14			
c9			
a14			
c10			
a15			
ブロック内評価後の 気付き	①ICT活用はどの学年でも積極的に取り組むことができ、様々な場面で活用できるようになった。一方で、モラルの意識が身についていない場面が多くなってきている。②自分の行動を振り返る機会を多く取り入れることで、自分の成長を感じることができたり、スモールステップで目標を定めることができるようになった。		
学校関係者 評価	朝比奈小では、子どもと子ども、子どもと教員、子どもと地域の方々、様々なつながりがしっかりとできており、学校教育目標の実現ができている。授業を参観しても、学び合いの場が多く見られ、ブロックの子ども也像が実現できていると感じる。特に個別支援学級を参観した際、一人ひとりの特性を鑑みた支援が見られた。学校だよりを毎月拝見し、素敵な内容で、子どもの様子よく伝わるが、ホームページの内容はすいぶん古いものもあり、見直すべきではないか。		
中期取組 目標 振り返り	コロナ禍の3年間で閉塞的であった教育活動が「学校創立50周年」を境に活性化した。子どもたちが自分の行動に責任をもち、役割を果たすことにより自己肯定感を高められるように、豊かな教育資源を取り入れた生活・総合の活動が積極的・継続的に行われるようとする必要がある。また、自ら課題を見出し自ら解決しようたりし、業務や学習に主体的・協動的に取り組めるように重点研究でも継続して取り組んでいく。学校からの情報発信は古いものを見直し、更新するようにしたい。		